

## ■ 利益 vs 公平性 ■

あなたは、次のどちらかを選べるとする。どちらを選ぶか？

- ① 12 ドルが与えられ、A と 6 ドルずつ分ける
- ② 10 ドルが与えられ、B と 5 ドルずつ分ける

比較をすれば、どちらが得かは明らかである。①を選べばいい。あなたは1ドル得をする。では、この選択をする前に、以下のような情報が知らされていたらどうか。

A、Bにはそれぞれ20ドルが与えられ、別のもう1人と分ける。決定権はA、Bが持ち、Aはもう1人に2ドルを与え、自分は18ドルを受け取った。Bはもう1人と10ドルずつに分け合った。

実験の結果はとても興味深い。不公正な配分をしたAと6ドルずつ分けるより、公正な配分をしたBと5ドルずつ分ける方を選んだ人が80%以上いた。つまり、自分の利益を1ドル犠牲にしても、不公正な選択をした人に利益がもたらされることを拒んだことになる。人間は合理的な自己利益を追求する一方で、公正性もかなり重んずるということだ。

この実験は「処罰ゲーム」と呼ばれ、行動経済学が高く評価され、2017年のノーベル経済学賞を受賞したリチャード・セイラーらが考案した。結果からは個人も企業も公正な取引、公正な対応という視点を欠くと、大きなしっぺ返しをくらう恐れがあることが分かる。

こういった理論に触発されたのか、環境負荷に対して、公正さを求める企業が現れている。中でも、アップル社の取り組みは群を抜く。2年前に43カ国にある340のオフィスと506の直営店すべてを100%再生可能エネルギーで運用し始め、部品会社などのパートナー企業にも100%再生エネルギーでの製造でないと取引を止めると持ちかけた。ダイナミックな変革が起きようとしている。

さて、明日は本校のスーパーサイエンスとスーパーグローバルの課題研究発表会である。それぞれ8グループは、テーマを掲げ1年以上かけて研究を進めてきた。その集大成である。コロナ禍で外国人留学生はオンラインでの参加となるのは残念だが、主に英語で行う発表や質疑応答も楽しみである。

SDGsを踏まえた研究も多い。若い頃から社会課題を自分事と捉え、科学と国際の視点で切り込み、解決策を模索する。そのこと自体に大きな意義があり、若者の新鮮な発想や行動が世の中を変えることもある。高校生で気候変動ストライキを始めたスウェーデンのグレタ・トゥーンベリの例も記憶に新しい。

冒頭で紹介した実験は高校生でも考案することができる。費用もかからない。だから、高校生のちょっとした疑問が、新たな実験を生み出し、その結果が世の中を大きく動かすこともあるのではないかな。いつか本校からそんな高校生が現れないかと夢想している。